

「ねえ、ねえ、お母さん」——小学校6年生の息子が台所に飛び込んでくる。彼はこのところ、買ったばかりの自転車に夢中である。今日はどのようなコースでどんなに遠くまで行ったのか、初めて走ったその辺りがどんなふうであったのか、こちらの忙しさなどおかまいなしにしゃべりまくる。

子育ての面白さは、子供と一緒に、人生をもう一度体験できるということだ。子供が男の子であれば、その面白さはなおのことである。なぜなら、女に生まれた私が自分では経験することのなかった男の子の心の世界にも、子供がいざなってくれるからである。

子供と会話しながら、子供と一緒に同じ目線で周りの世界を見まわすと、毎日見る家の中も外の景色も、まるで違って見えるから面白い。同じ景色の中に違う輝きを見つけたり、見えなかったものが見えてきたりする。

縁あって、私が育児雑誌づくりに係わるようになったのは、今をさかのぼること19年前。そして、ついこの間その出版社を辞めるまで、つまり20年近く、私は毎日できたてのホヤホヤの母親たちとつきあってきた。

20年も育児に係わる仕事をしていれば、育児に関する私の知識も経験も自然と膨らんでくる。しかし、知識が豊富であればいい育児雑誌がつくれるのかといえば、そんなことはない。キャリアがあれば母親がわかるかといえば、そんなことはないのである。

子育ての営みは、大古の昔から基本的には何

ら変わっていない。したがって、母親たちの子育ての悩みも「十年一日のごとし」であることは確かだ。

しかし、5年前「おっぱいが足りないんです」と訴えてきた母親と、今年そのように訴えた母親とは違う。さらにいえば、昨日の母親と今日の母親とも違うのである。受けてきた教育も生活する社会環境も違えば、育児文化も日々変化している。そして、個々の母親の育った環境も違うし、母親と子供の個性もまたひとりひとりみな違う。

立会い出産を望む妊婦さんのひとりひとりにその心の内を聞いてみると、これが実にさまざまである。同じ結論であっても、そこに至る論理は一樣ではないことがよくわかる。

育児の上でとんでもないことをやっている母親に、どうしてそのようなことをしているのかとたずねてみると、自分なりに一生懸命に考えた結果であったりする。「ふーん、なるほど」「そうか、そうか」と、うなずいてしまったり、その母親の一生懸命な気持ちに、いとおしさやいじらしさを覚えたりもする。

母親と同じ目線で、共に目の前の子育てと、その周りの世界を見てみると、思わぬものが見えてくる。ひとりひとりの母親の驚きやうれしさを共にすることができる。母親から学ぶことができる。母親と響きあう会話ができる。

そういう中でこそ、持てる知識が力を発揮するであろう。母親の力にもなれるであろう。そんなふうに思うのである。